

第十三号

対談

「中島靖子×奥田雅楽之一」

「祖母から孫へ伝えたいこと」(上)



メルマガ noichi 十三号。一周年を迎えたメルマガ noichi は、今月、来月と特集号。対談『中島靖子×奥田雅楽之一』「祖母から孫へ伝えたいこと」(上)をお送りします。

父・中島雅楽之都、宮城道雄師、恩師のこと、音楽学校時代、戦争…。

祖母が穏やかな口調で語るの「激動の時代」でした。その時孫は何を思い、何に迫ってゆくのか。そこに、今回の対談の意義がありました。

早いもので、メルマガ noichi は今月で一周年を迎えました。当方の思い付きで始めたメールマガジンでしたが、お読み頂く読者の方々のお陰様で、一年間続けてくることが出来ました。本当にありがとうございました。

感謝の気持ちを込めまして、今月、来月を特集号と致します。節目のゲストは満を持しての御登場で、中島靖子御家元をお迎えし、対談『中島靖子×奥田雅楽之一』とさせて頂きます。

中島靖子氏は、正派二代目家元、公益財団法人正派邦楽会理事、日本三曲協会や生田流協会などでも重役に就いて、責務を果たしておられます。…まあ要するに私の祖母なのですが、今回は『祖母から孫へ伝えたいこと』の副題を付して、読者の皆様には、例えばそういう角度からも読んで頂くと、又違った何かをお汲み取り頂けるかもしれません。

この度の対談をご快諾頂きました中島靖子先生、そして日頃からお読み頂けます読者の皆様に、編集部一同心から感謝申し上げます。メルマガ noichi 13号、お楽しみ頂ければ幸いです。

奥田雅楽之一

『生い立ち』

雅楽之一…まず、生い立ちからお伺いしたいと思えます。お生まれになった場所はどちらになりますか？

中島靖子…はい、千代田区、昔は牛込区富士見町というところ、外堀通りから一口坂を上っていった途中の、法政大学の敷地になっている、何もない三角形になっていました。

雅楽之一…その頃の記憶はおありですか？

中島…そうですね。家の二階がお弟子さんたちのお稽古場で、そこへ上がっていくと「坊や来たか」なんて…そう。私、なぜか当時は坊やと呼ばれていました。それと私は、子供の頃は頭が大きくてひよろひよろした体型だったものから、よく転んだそうです。お弟子さんたちがよく散歩に連れて行ってくれたのですが、散歩に連れていくと転んで、転んで帰るとお弟子さん達が奥様に怒られて…。

雅楽之一…そうですね(笑)と、初めて通われた学校はどちらだったんですか？

中島…富士見町にいた頃はまだ3才でどこにも通いませんでしたが、市ヶ谷に移ったのが昭和4年でしょう。

雅楽之一…それは今、正派邦楽会館があるところですか？

中島…そうですね。私の出身校は九段精華です。小学校から女学校へ通っていました。その時はどういう訳か男の子が一人だけいました。同じ頃に、宮城道雄先生のところにも通い始めました。当時石瀬さん、長野さんにお稽古に連れて行ってもらうと、何を習ったのか何を歌ったのかもよく



撮影日時:2012年6月6日 場所:霞山会館「鹿鳴の間」 取材協力:霞山会館

覚えてないんですけど、家に帰って習ったものを初めから弾かないと、内弟子さんたちが許してくれなかったんですよ。

雅楽之一…それは一般的な習わしである6歳6月6日の入門ではなかったのですか？

中島…ではなかったと思います。もつと前からさわっていました。

雅楽之一…それより前だったと？

中島…そうですね。初めは父(中島雅楽之都)に習いましたが、やはりお稽古に行くなら宮城先生のところへ、と。それからしばらくして久本(玄智)先生のところへ唱歌を習いに行きました。それが小学校低学年の時です。それからだんだん戦争に向かっていく時代になります。

雅楽之一…一連のお話は、皆さんが靖子お嬢様を大切に思っていたのが、伝わってくるようです。

中島…それから、4つ下に由縁という妹がいたんです。私は子供の時からばんやりと育ったのですが、由縁は利発な

子で、いつも学校にはいくスカートをきちんとなんたでおくような性格でしたが、私はそこらへんに脱いで置いておくような性格でした。私より、由縁の方がしつかりしていたんです。

雅楽之一…由縁さんもお箏を弾いていらしたのですか？

中島…それは、覚えてません。ただ、一緒に歌を歌った覚えはありません。

雅楽之一…初代の随筆(はどの日々)に由縁さんのことがいくつか書いてありますね。由縁さんが病気で亡くなられてしまったくあたりは、いつ読んでも胸が痛みます。

ところで、初舞台の記憶はあるのでしょうか？

中島…それも覚えはないのですが、上田公会堂で母方の祖母と父方の祖母が一番前の席で、私が弾いているのを聴いている写真を見た覚えがあります。

雅楽之一…そうしたら、探せばあるのかもしれないですね。

『父のこと』

雅楽之一…では、お父上の中島雅楽之都氏について、これはあくまでも娘の立場からということでお答え頂けると嬉しいです。

中島…わかりました。

雅楽之一…まず、どんな御性格だったのかをお伺いしたいです。

中島…当時、市ヶ谷の家は3階建てで、3階に私たちの子供部屋があって、2階に父の部屋があったのですが、その父のところにはしょっちゅう相談に訪れる方が来ていて、相談が終わると今度は上からお弟子さんが降りてきて…というふうには、いつも誰かが訪れている環境でした。人の話をしつかり聞く人でした。大らかで、ユーモラスなところもあって…

雅楽之一…娘からパパに相談することはなかったのですか？

中島：それは特別なかったのですが（笑）、こんなエピソードがあつて不思議とはつきり覚えてるのですが、あの当時、床の間に大きな虎の絵が描いてある掛け軸があつたんです。そこで父が

「靖子、この虎を捕まえられるか？」と聞いてきたんです。そうしたら私が

「パパ様が追い出してくださいましたら」

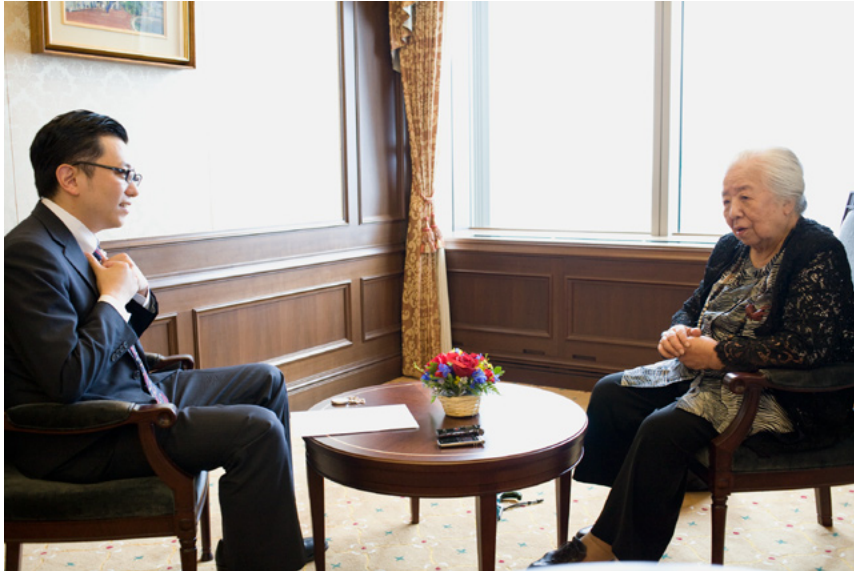
と答えたんです。まるで禅問答のようなやりとりで、そんな変わった変な親子でした。

雅楽之一：アハハハハ

中島：父は忙しくて遊びにきてくれる事は殆どなかったのですけれど、一度だけ夏休みに海に行ったことがあるんです。浮き輪をして海で遊んでいた時のことですが、ボートに乗っている父に近づくと、どういう訳かあんばんをくれて、それを海の中で食べた思い出があります。

雅楽之一：なんだか不思議ですね（笑）何が思い出に残るかわかりません。初代（家元）の意外な一面にも迫ってみましたのですが、例えば：初代の趣味。知ってる中から申し上げると、骨董品蒐集が大変なものだったとお聞きしたことがあるのですが。

中島：そうなんです。近く二七不動さまがありまして、その通りの骨董品屋さんが好



きで、お散歩行って帰ったかと思うと大きな荷車を曳いて骨董品屋さんがついてくるんですよ。そうすると母が

「また！ おとうさま！」

ってこわい声で言うんですが、父も

「はいはい」

とか言ってもう運ばせちゃってましたけど（笑）

雅楽之一：現在でも正派音楽院や中島家や唯是家、確かウチの奥田家にも。あちらこちらに仏像がありますね。あれは初代が亡くなられた時に奥様（後妻：中島禮子）が分けられたとお聞きしました。あれもやはりその骨董品の一部で？

中島：そうですね。なにしろ荷車に積んで帰ってくるくらいですから、そりやもう、いろいろ、いろいろ買って帰ってきました。

雅楽之一：二七のお不動様に信仰があつて、必ず2と7のつく日にはお参りに行くようにしていたらしいのですが、実はもう一つの目的がその骨董品屋さんだったと。

中島：そうそうそう。きつとそうです。

雅楽之一：実はどちらが本命だったか、わかりませんね。

中島：そうですね（笑）

雅楽之一：では芸の話に。初代の得意な曲というのはありましたか？

中島：そうですねえ、古曲で「笹

の露」はよく弾いてたと思います。

雅楽之一：ご性格にあつていたのでしょうか。「笹の露」は、酒を酌み交わす内容の曲ですよ。

中島：私が（初代）富山清琴先生に光栄にも一度この曲のお三絃を弾いていただいたことがあるんです。その時、「父が、ささ、もう一杯。という気分です。弾くようによく言っていました」と富山先生に申し上げたら、

「お父さまは大阪の流れを汲んでいるから、私と流れは似ているからね。」とおっしゃって下さいました。

雅楽之一：なるほど。ルーツというのは実に面白いものですね。

『戦争の時代』

雅楽之一：少し話が戻ります。やがて戦争があつてその後、アメリカへ留学なさいますね。戦後間もない当時、一人娘をアメリカに行かせたことは、親としてとても心配だったと思うんですけど。

中島：そうですね。ただ、ちよつと話を戻さなくてはいけないのは、やはり戦争のこと。戦争で家が焼けた時、私は上田に疎開してました。

雅楽之一：上田はお母様の故郷ですね。

中島：はい。東京で大空襲があつて、ひと月くらいしてから東京に戻ってきたのですが、当時は上田からの汽車が、上野駅に着きました。着いたら、街は一面何もなくて：。何も無い中を上野駅から市ヶ谷まで歩いて帰りました。どのくらいかかったのでしょうか：やがて市ヶ谷に着いて、その時初めて見た父の姿は、一面焼け野原の中を、一生懸命シャベルで掘っている姿でした。それを見たとき、親というよりも、すごい人だなあと感じました。どうにもならないような状況の中を、一人でシャベルで掘るなんて：。

それで、お隣の焼けてしまった空地にきゅうりやかぼちゃを植えて、来た人みんなに食べてもらおうと、人が増えるとその葉っぱやツルも全部入れて、もてなすことを父は徹底していました。

雅楽之一…東京の空襲の後ですね。

中島…その空襲の時も母と、内弟子さんが二人ほどいて一緒に生き延びました。

雅楽之一…要するにご両親は市ヶ谷に残って、娘は一人疎開に。

中島…はい。戦争がすんで何ヶ月かの間に満州や朝鮮にいた人達が引き上げてきたら、

「日本へついたら、きつと俺を訪ねてくる。だからここを動いてはいけない」と。本当に今でも思い出すけど、身寄りのない人が命がけで東京へ出て来て、坊主頭で男のようにして、泣きながら玄関に立っていて、「ああ、先生。やっぱりここにいて下さった」って言うてくれたり…やっぱり今思うと、父は、遠くに行っただお弟子さんたちを、自信を持って迎えていましたね。

雅楽之一…人が一人増えると芋粥の水と葉っぱが増える。というお話は、その時のことだったんですね。

中島…そんなでしただけど、みんなで食べていました。

雅楽之一…中島雅楽之都。正派会員ということに限らず、きつ



と人に対する愛が深く、大きかった方ですね。

中島…父は、正派だからということはありませんでした。本当にそういう人だったのだと思います。

雅楽之一…では、音楽学校へは、戦争が終わってから通われたんですか？

中島…戦争中ですね。

雅楽之一…え、戦争中ですか。では途中、一度中断して？

中島…いえ、中断というよりか学校へは行っているけど、ほとんど授業はなくて、艦政本部かなんかの。もちろん学校で宮城先生のお稽古も受けましたし、色んな授業も受け

たんですけども、それと同じくらい鉄砲の肩にあててホフク前進とか長刀、それから竹刀、そんなものを学校で習ったりしました。

雅楽之一…そうだったんですか。それは全然知りませんでした。

中島…習ったというか、やったというか。

雅楽之一…通われたのは今と同じ4年間ですか？

中島…3年ですね。3年と言っても、本当にまともに勉強出来たのは、1年半くらいかしらね…。あと続いて、研究科に1年。戦争が終わってから行けたの。

雅楽之一…そうですね。合計すると4年間？

中島…まあ、4年近いくらい。

『私の師』

雅楽之一…学校では生田流の宮城道雄先生、山田流では中島島欣一先生なかのしまきんいちもいらつしやいましたか？

中島…はい。いらつしやいました。中能島先生はいらつしやいましたけど、私たちはお習いすることはなかったです。

雅楽之一…そうですね。音楽学校に限らず、学生時代に教えていただいた先生で印象に残っている先生はどなたかいらつしやいますか？

中島…宮城先生のお姿やレッスンは別にして、喜代子先生ですね。

雅楽之一…宮城喜代子先生ですね。

中島…宮城先生は椅子のお部屋で、喜代子先生は日本間だったんですけど、靴の脱ぎ方からお辞儀の仕方から、そういうことを、卒業後も、私が家元になってからも、ちゃんと一つ一つ教えてくださって。

雅楽之一…芸の先生に限らず、音楽の授業、あるいは他の分野の授業ということでの先生はいかがですか？

中島…それは、やっぱり私は平井康三郎先生です。

雅楽之一…作曲家の。

中島…平井先生が戦争に行つてらつしやる間、橋本國彦先生がしばらく教えてくださったんですけど、平井先生…もう忘れられないというのかしら、ちよつとお弾きになる音楽がすごく私は心に響いて、「ああこの先生素晴らしい！」って。でも、何しろ私の楽典の成績が非常に悪くて、平井先生が

「もうこの子はダメだ、上に進められない」とおつしやつた時に、宮城道雄先生が

「今にきつとよくなる子だから待ってやって下さい」とおつしやつて下さって、平井先生が許して下さったという話をちよつと後で聞いたことがあります(笑)

雅楽之一…ご卒業後も平井先生に作曲を師事されたのは、

先生に対する情熱からですか？

中島：それは勿論ですが、平井先生とうちの父がすごく気が合ったんです。

雅楽之一…なるほどなるほど。

中島：それで先生も楽しみにいらっしやるご様子でしたし、父も楽しみにしてそうだったし。

雅楽之一…なるほどねえ…。

中島：わりに心地よく、遊びや練習に来てくださいました。

雅楽之一…先生からお習いしたことで、印象に深いことは？

中島：平井先生は、歌曲が得意な先生ですけど、何しろ徹底的に詞を読みなさい、歌を読みなさい、読んで読んで…

イントネーションを、東京の人なんだから、イントネーションを常に気をつけてないと聞いてる人にわからない節をつけることは、絶対にあつてはいけない。これはよく言われましたね。

雅楽之一…それは旋律とイントネーションは無関係ではない、密接に関係しているということをおっしゃってますね。

中島：そこは歌曲を書く側に言わせれば、とても大事ななん

だと。

雅楽之一…誠に珠玉のお言葉です。

…さて、それから、いよいよアメリカ留学ですね。

中島：そうです。ここまでくるのに、案外長かったわね(笑)
(次号に続く)

中島靖子(なかしまやすこ)
プロフィール

幼時より、父・中島雅楽之都に琴を学ぶ。東京音楽学校(現・東京芸術大学)邦楽科卒業。同校研究科終了。在学中、宮城道雄・宮城喜代子両師に師事。また、作曲法を平井康三郎師に師事。カリフォルニア州モントレイ・ペニスラ・カレッジに留学。1957年唯是震一と結婚。1958年パリ・ユネスコ国際音楽祭に日本代表として参加する等、欧米各地で公演。1979年正派二代目家元継承、芸術祭賞を受賞。2001年伝統文化ポラ賞を受賞。2004年松尾芸能賞受賞。現在 公益財団法人正派邦楽会・理事長(二代目家元)、社団法人日本三曲協会監事、生田流協会副会長、他

TNBのそれっぽい話⑨

三味線演奏家 (http://ameho.jp/mb_zz/) 田辺 明

日常生活において何の気なしに聞こえてくる音や音楽に気を留めてみると、音楽的・楽典的にさまざまな発見があったり(なかつたり)します。

先日、何気なく歩いていたら箏のお稽古の音が聞こえてきました。中が見えたのでちょっと覗いてみたら、お年寄りの方で椅子に座ってレッスンを受けていました。立奏つてやつですね。もちろん、先生は正座してました。

足が悪い人にとって立奏は便利です。長時間の練習も楽ですしね。しかし最近、日本人も体格・体型が変わってきたせいか、正座ですぐしびれる人や、うまくそれができない人をよく見かけます。また、最近ホールや舞台だけでなく、様々な場所での演奏やスタイルがあります。ロビー・カフェ・レストラン・ライブハウス…。演奏する場所と客席の高さが同じことが多いので座奏というわけにはいなくなり、そういう場合の立奏は大変有効です。さらに、洋楽器との合奏も珍しくはなくなり、立って演奏するというスタイルも見かけます。そのほうが演奏や演奏者の表情もよく見えて視覚的にも楽しめます。

先日、三味線を立って演奏するためのストラップ開発に、京都の専門店(ストラップ工房OTO)さんからモニターを依頼されて引き受けました。こういった多様な演奏シーンへの対応や、本番以外でも練習で座奏や立奏に疲れたら気分転換に立って練習すると違う光景が見えてくるのでは、という想いからです。足の裏には多数のツボがあるので、裸足で立って弾いてみるのは刺激的です。

そしてもう一度正座をしてみる。日本の文化の発展は立ったり座ったりの繰り返しだからです。



◎あともぎ◎

小学校に行く前、お寺に通っていたことがある。修行に行っていたわけではなく、忙しい親に代わってお寺が小さな子どもたちの面倒をみてくれていたのだ。そういう場所はいよいよ藍毘尼園(るんびにえん)と呼ばれていた。今でもお寺の横に幼稚園を見かけるのはその名残りだろう。藍毘尼とはお釈迦様が生まれた土地の名前とされている。

そんなわけで、ぼくらは毎日お寺に通って、勝手に鐘をついたり、ご本尊によじ登っては、しかられた。午後の紙芝居では、悪い子が紙芝居を滅茶苦茶に入れ替えても、ぼんさんは少しも慌てず、話をうまくつないで笑わせてくれた。それ以外は特にやることもなくて、行かなくても構わなかったのだが、毎日通う理由があった。帰り際、ぼんさんは大きなザルを抱えて、一人ひとりにあんぼんを渡してくれた。小さい子から順番に列をつくって、あんぼんをもらった時の感触は、今でもはつきりと覚えている。

グラフィックデザイナー (http://www.1938.jp) みやはらたかお